藤原定家
藤原家隆

森直太郎 共著
尾山篤二郎 著

歴代歌人研究

大倉書店

藤原定家
藤原家隆

—歴代歌人研究—

昭和十三年十一月十五日印刷
昭和十三年十一月十八日發行

著者　森直太郎
　　尾山篤二郎

東京市麹町區六番町六番地
發行者　岡本正一

東京市麹町區五番町十二番地
印刷者　谷口熊之助

東京市麹町區五番町十二番地
印刷所　合資會社　谷口印刷所

東京・麹町・六番町
發行所　厚生閣
電話九段(33)三二一八番
振替東京五九六〇〇番

序

本稿は、筆者が日頃抱懷せる定家論の一端で、謂はばその序論とも見らるべきものである。

執筆に當つては、出來得る限り狹くと考へた。能ふべくんば、一事の展開に俟つて、定家の生涯を跡づけてみたいと望んだが、成し得る所でなかつた。唯斯る所期の下に稿を起した爲、立論の上に稍〻重複する所があつた。

又筆者の目的の一つは、一資料の有する意義の凡てを究明して自たいと思ふ所にあつた。從つて資料はこれを極限し、同一資料を繰返し引用する事となつたのも亦止むを得なかつた。

本稿には、當然「定家と漢文學」「繪畫史と定家」の二章が添ふべきであつたが、

紙數の都合上、これは省かざるを得なかつた。

更に本稿が、先輩諸氏の研究に俟つ所のものである事は言ふまでもない。記して謝意を捧ぐ。

昭和十三年十月

森　直　太　郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

目次

第一章　藤原定家……一
第二章　時代の概說……二三
第三章　當時の文學界……三三
第四章　當時の和歌文學……四五
第五章　定家の時代性……七〇
第六章　定家の時代的意義……一二三
第七章　定家の人及び作品……一四七

第一章　藤原定家

一

藤原定家は應保二年（一八二二）に生れ、仁治二年（一九〇一）八十歳の高齢を以て世を終つた。その生涯は殆んど亂世に終始したといふべきである。而も八十年の彼の存在が反映する光彩は、我が和歌史上に一大時期を劃する大きな力となつて現れて來た。當時に倒影した力、或は後世に反射したそれは一口に述べつくすべくもない。其處には嘗て語らるべき多くの問題があつたが、最近二三年間に於ける我が國文學界の中世歌學集注は、それ等の一つ一つを見事に解きほぐして行つた。斯くて定家が史上に投げた歴史的な八十年は、之等の先人により縱横に論じつくさ

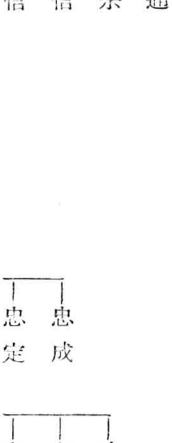
れて餘す所がない。定家は今や極附である。淺學不才私如きが今更加ふべき何物もない有樣である。本叢書で定家を受持つた私は内心忸怩たるものがあり、ペンを擱いて躊躇せざるを得なかつたが、今となつてはどうなるものでもない、屋上屋の謗を覺悟しつつ漸く持つたペンである。讀者諸氏の寛恕を得れば幸である。

謂ふところの定家の歌學、定家の和歌に就いては、既に反覆研究が積まれてゐる。從つて今はこの方面の問題には主には觸れない事としたい。從來の定家研究を一瞥して、最も不足してゐると思はれる部分で、ひそかに考へ得た所は、歴史の流れの上にとらへてみた定家といふ事である。卽ち時代の思潮、環境を背景としてみた定家の研究は、私の眼にもいささか不十分に見えた。從つて本稿は文化史の上に浮べて見た定家の姿及びその意義を中心として、これに作品を對照しつつ慌しき一瞥を投げてみたいと思つてゐるのである。唯資料の不足に加へて、性來の惰情は被ふべくもなく、徒に大を望んで振る蟷螂の斧にも如かざるの感を恥ぢてゐる。

二

順序として最初に簡單な傳記を述べておく。定家はその第を二條京極に持つてゐた所から、京極中納言、或は京極黄門と呼ばれたり、又民部卿をつとめてゐた關係上、戸部尚書等とも云はれてゐた。

二條天皇の應保二年彼は有名な俊成を父、藤原親忠の女を母とし、定長（後の寂蓮）、隆信を義兄に持つて（註、隆信は定家の母が俊成に嫁す以前、皇后宮少進爲隆との間に出來た子なり。）歌學累代の名家、御子左家に誕生した。時に俊成四十九歳であつた。



藤原定家

彼は幼名を光季と云つたが、五歳にして季光と改め、更に翌六歳の暮に定家と改名した。同時に從五位下となり、紀伊守に任ぜらるるに至つた。

彼は藤氏としても稍々末流であつた上、當時既に藤原家はその勢力を失墜し、これに代つて武家が天下を左右してゐた時代であつた爲め、官途に於ては庶幾する程の望みは達せられなかつたらしく、よくその不遇を嘆じてゐるが實際には當時の彼として不遇を喞つべきではないと思はれる所もある。今試にその補任を表示してみれば、

年號	年齢	補任
仁安元年十二月三十日	五歳	叙從五位下

仁安二年十二月三十日	六歲	任紀伊守
安元元年十二月八日	一四歲	俊成辭右京大夫以定家申任侍從
治承四年一月五日	一九歲	敍從五位上
壽永二年十二月十九日	二二歲	敍正五位下八條院御給
文治五年十一月十三日	二八歲	任左權少將
建久元年一月五日	二九歲	敍從四位下少將如舊
建久二年二月十日	三〇歲	任因幡權介
建久六年一月五日	三四歲	敍從四位上
正治元年一月三十日	三八歲	任安藝權介
建仁二年閏十月二十四日	四一歲	任左權中將
建仁三年一月十三日	四二歲	任美濃介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

承元四年一月十四日	四九歲	任讃岐權介
同七月二十一日	同	辭中將以次男爲家申任左權少將
建暦元年九月八日	五〇歲	下官任侍從敍從三位
建保二年二月十一日	五三歲	任參議侍從如故
建保三年一月十三日	五四歲	兼任伊豫權守
建保四年一月十三日	五五歲	任治部卿
同三月二十八日	同	辭侍從
同十二月十四日	同	敍正三位
建保六年七月九日	五七歲	遷民部卿
承久二年一月二十二日	五九歲	任播磨權守
貞應元年八月十六日	六一歲	敍從二位辭參議權守如元

安貞元年十月二十一日	六六歳	罷民部卿敍正二位
貞永元年一月三十日	七一歳	任權中納言

即ち、正二位權中納言にまで進んだ彼である。「父俊成の三位であつたのに對して不遇とはいはれない」と述べられた谷鼎氏の説（岩波講座日本文學藤原定家）がそのまま首肯される。

然し彼にしてみれば、父俊成が官途を放棄してまで父子二代がかりの出世を希求した事と云ひ、更に作歌道の世界にのみ限られてゐたとは云へ攝政良經の知遇を得親交を結び、何れかといへば師表の地位に立たせられてゐた關係と云ひ、その餘りにも宿命的な低官に甘んじなければならなかつた事の堪へ難さを味つたのでもあつたらう。

この不滿はやがて彼の大を成す素因をなしたかに思はれる。憤懣に對する埋合せと云へば可笑しからう、然し内に不測の怒を藏すればこそ、あれ程烈々たる潑力の光芒を發したのではなかつたかと思惟される。一切の激怒は發して歌道精進に集注されたとしか思はれない。假りに文治五

年二十八歳にして宜秋門院入内御屏風歌作者に加へられてより、承元四年左權中將を辭した四十九歳頃までの彼を取上げて見ても一目でそれが首肯されるほど、その活躍は驚異的で正に我等を瞠若たらしめるものがある。この何物をも顧みない精進の原因が官途不遇に對する怒りにのみあつたとは云へぬ、他にも種々の原因がある。それ等はいづれ後章に詳說するが、少くともその一素因をなしてゐること丈は否めない。

さて定家の歌人的生涯への振出しは十六七歳頃に置かるべきであらう。治承二年三月十五日に催された「加茂別雷社歌合」が、彼の十七歳の時であつたがそれに三首の自歌を入れてゐる。次いで養和元年二十歳の春四月始めての百首歌を詠んでゐる、初學百首である。爾來矢繼早の百首歌に漸く歌人的基礎を作つたかに思はれる。今定家の作歌期間を私は三期に區劃する。卽ち、治承二年（十七歳）「加茂別雷社歌合」出會より、建久四年（三十二歳）母を失つた頃までを第一期とし、建久五年（三十三歳）の頃より「拾遺愚草」を編した建保四年（五十五歳）頃までを第二期、建保五年（五十六歳）以後を第三期とするのである。

第一期は初期或は百首歌期とも云はるべき時で、初學百首、堀河百首（壽永元年二十一歳）を經て、文治四年二十七歳の時に奏覽のあつた「千載集」には八首の歌を入選せしめ、次いで宜秋門院入内御屏風歌の作者に加へられ、更に左大將良經とも親交を結ぶに及び、漸く歌人的地歩を占め、母逝去の建仁四年頃に至るまでの間、百首歌を詠むこと實に八、九回に及んでをり、西行法師の入滅をも見送つてゐる。

第二期は元久二年四十四歳を以て、その撰進に關與した新古今和歌集の完成を中心とした大活躍期である。この期に於ける彼の活躍は誠に凄じいものであつた。建久六年三十四歳であつた彼は民部卿家歌合に出會して以來、殆んどありとあらゆる歌合毎に出會し、殊に正治二年（三十九歳）には「院百首」の作者に選ばれ、次いで内昇殿を許される榮を擔ひ、翌正治三年に和歌所が再興さるるや、その寄人をも拜命してゐる。新古今集撰定の半ばにして當時歌壇の大元老たりし父俊成は九十一歳の高齢を以て歿し、これと前後して式子内親王、内大臣通親、沙彌寂蓮、後京極良經、宮内卿、鴨長明等の大家が相次いで他界してしまつた。斯んな所からも極めて自然に新

藤原定家

古今集撰進後の定家は歌壇に雄大な地歩を占めるに至り、その嶄然たる頭角は全く他を壓していよいよ父俊成の後繼者として歌壇の領袖となつた。かくて元久三年四十八歳にしては「近代秀歌」の著を送り、建保元年五十二歳を以て仙洞歌合を判じて以來、禁裏に屢々催された歌合に判を傳へてゐるものが多い。然しこの頃より連歌に興味を持ち始め、作歌に對する興味の稍々減退したかを思はせてゐたが、遂に建保四年五十五歳の三月、家集「拾遺愚草」三卷を編して、作歌生活三十餘年間の自作總決算をした。

第三期は學究期とも著述期とも云はるべき時期で、作歌興味減退と共に漸次好學的、趣味的性情の表れて來た時である。彼の歌學書の大半は天福元年七十二歳を以て致仕出家をするまでの十五六年間に出來上つたと云つても差支ないであらう。從つて有名な彼の歌學の基礎は、この晩年に構成され確立されたものである。その重なるものを擧げれば、

承久元年　五八歳　「毎月抄」

承久三年　六〇歳　「顯註密勘」

貞應元年　六一歳　「三代集之間事」
貞應二年　六二歳　古今集書寫（貞應本）、後撰集書寫
嘉祿元年　六四歳　源氏物語書寫（青表紙本カ）
嘉祿二年　六五歳　古今集書寫（嘉祿本）、「僻案抄」
寛喜二年　六九歳　源氏物語書寫
寛喜三年　七〇歳　伊勢物語、大和物語、拾遺集書寫
貞永元年　七一歳　「長歌短歌古今相違之事」
天福元年　七二歳　千載集書寫
文暦元年　七三歳　後撰集書寫、拾遺集書寫
嘉禎元年　七四歳　土佐日記書寫

等である。尚この外「更級日記」「和泉式部集」を始め多くの書寫本があるが、何れも年代不明である。又これ等は書寫と共に、その卷末奥書に覺書き或は短評等を書いたものも少くない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo